研究ノート

江見水蔭「鉱夫の恋」からみる一九〇〇年代の文学意識

安藤香苗

はじめに

江見水蔭という作家の名は、現在では極めて限定的にしか見ることがなくなっていると言ってよいだろう。代表作として小説「女房殺し」（『文芸倶楽部』明治二八年一〇月）があり、その他には晩年に書かれた回想録『自己中心明治文壇史』（昭和二年一〇月、博文館）が明治文壇を内側から語る貴重な資料として現在でも参照される。が、逆に言えば、水蔭の著作で参照され言及されるのは、現在ではほぼこの二作品に限られるとも言える。長短合わせて六〇〇編超の作品を残し、同時代には当時の代表作家として名が挙がることも少なくなかった人物にもかかわらず、である。現在では、『自己中心明治文壇史』で語られた明治文豪たちの活動や発言が資料として取り上げられることはあっても、そこに描かれた水蔭自身の活動に注目されることはほとんどない。

江見水蔭が文学史上でこのような扱いを受けるようになった理由のひとつには、その活動の通俗性にあると考え

られる。代表作「女房殺し」を発表した明治二〇年代には、水蔭は硯友社系の作家として認識されており、抒情的な文章が評価されていた。それが次第に最新の文化事象を積極的に作中に取り入れたものや冒険小説や探検小説などを数多く書くようになった。また、筆の速さから多作ではあったが、それは同時に乱作とも言える作品完成度の不安定さを生み出した。これらの要因から、正統なる文壇作家と通俗作家との間で水蔭に対する評価は揺れ動くこととなる。己の作品に対する評価が揺れ動くことに連動し、水蔭自身の作家としてのアイデンティティも揺らぎ続ける。文壇の中心と見なされることへの憧れと自負と、活動が思うように評価されないことに対する苛立ちと開き直りとの間で、天才型作家とは違った立場から「文学」とは何かということを考え実践していた人物として、江見水蔭については彼の仕事を再検討すべき時期に来ているのではないか。

本稿では、水蔭が何をもって小説の文学性なるものを認識しており、同時代の文学をどのように捉えていたかを確認する一助とするために、『神戸新聞』立ち上げに携わった水蔭が新聞社から退陣するきっかけとなった小説「鉱夫の恋」を巡る問題をまずは整理しておきたい。

一、神戸時代の江見水蔭

江見水蔭が発刊に携わった『神戸新聞』を去るきっかけとなった小説「鉱夫の恋」について論じる前に、まずは水蔭と『神戸新聞』との関わり[1]について整理しておこう。

明治三一年二月一一日に創刊された『神戸新聞』は、兵庫の地元紙『又新日報』に対抗すべく発刊されたという経緯を持つ。当時の首相・松方正義が繰り返す新聞弾圧に対し、『又新日報』は政府批判の論調を展開していた。『又新日報』の経営を支えたこともある川崎造船所の経営陣にとって、同紙の政府に対抗する姿勢は都合が悪かった。

造船所経営に関して政府との関係を強めたい川崎側――松方幸次郎（松方正義の三男・川崎造船所社長）・川崎正蔵（川崎造船所創業者）・川崎芳太郎（正蔵の養子・副社長）――と、『又新日報』側との利害は一致することなく、川崎側は同紙に対抗する新しい新聞として『神戸新聞』を創刊すべく動き出した。

創刊準備責任者として起用された岩崎虔は、『又新日報』で日清戦争従軍記者を務めていた時代に他紙の記者仲間を通じて硯友社とのつながりを持っていた。そのつてを辿り、主筆兼編集部長として白川鯉洋、硬派主任に尾上新兵衛（久留島武彦）、そして軟派主任として江見水蔭を『神戸新聞』に迎え入れることになる。

『神戸新聞』創刊前夜を水蔭は次のように振り返る。

> 其頃神戸には『神戸又新日報』が唯一の新聞紙であつた。古い歴史を持ち、勢力もあつた。其所へ別に新らしく一新聞を起さうといふので『神戸新聞』といふ名前だけは確定してゐても、編集方針其他に就ては、何の準備も整うてゐなかつた。[2]

川崎邸で新新聞の創刊を目指す会談が行われてから約二ヶ月後に創刊号が発行されている点から見ても、現場の運営陣に一任する形で創刊が急がれたことがわかる。

巌谷小波からの抜擢で関西入りした水蔭は、中央文壇の風を地方にもたらすことを期待されているという自負を強めていた。また、編集部内に新聞の経験がある者が少なかったことも、自らが編集部を牽引せねばならぬという水蔭の気負いを増強した。こうした自負の裏面には、東京の文壇から物理的に離れたことを都落ちと捉える彼自身のコンプレックスがあった。

雑報、文学欄、それから、演芸、角力、殆ど一手で書きのめすので、自分は未だ曾て此時位の勤勉――文筆労働の激務に当つた事は無いのであつた。これ位東京で勉強してゐたら、何も神戸落をしなくても好かつたのにと、後悔せずにはゐられなかつた。[3]

また、当時の関西文壇について、水蔭は次のように語っている。

その当時の関西文壇は、迚も問題に成らぬ程幼稚なもので、殊に新聞小説と来ては、未だ宇田川文海や、仮名垣魯文の書いた草双紙程度のもので沢山であつた。（大阪朝日の霞亭とても大甘物を書き、大阪朝日の幽芳が、間もなく『乳兄弟』（原文ママ）を出しかけた頃だ。）現に対象新聞の『神戸又新』の小説を見ると、明治に於ける新聞続き物元祖古川魁蕾子が生存してゐて（中略）お屋敷騒動物を旧式の筆で連載してゐて、それが又非常に評判が好いといふ有様なので、ウンザリせずにはゐられなかつた。[4]

このように水蔭の目には関西の文学事情は東京で展開されているものよりも数段遅れたものとして映っていた。「大体に於て文壇は幼稚なもので、自分は鯉洋と共に、及ばずながら関西人に文学思想を注入すべく決心して、紙上で新進の文芸品の寄書を歓迎するに努め」たと水蔭は語る。中央文壇との距離を感じながらも孤軍奮闘していたこと、そして東京――中央文壇を恋しく思っていたことが『自己中心明治文壇史』には繰り返し描かれている。たとえば中央文壇との距離を感じたエピソードとして、関西青年文学会神戸支部第一例会（明治三二年二月一九日）に出席したときの思いが次のように述べられている。

此席上で自分が驚いたのは、鏡花の人気の盛んな事で、若もそれが紅葉の玄関番であつたなんど、少しも知らぬのみか、偶ま知る者あるも、其為に鏡花を一層尊敬するといふ有様であつた。

わづか一年の間に鏡花の売出したのに驚かされ、又自分が反比例に世間から忘れられかけてゐるのに考へ及んで、いよ〳〵東京へ帰りたくて成らなかつた。

水蔭が来神する直前、すなわち明治三〇年頃の泉鏡花は新進気鋭の観念小説作家として文壇の注目は浴びていたが「世評皆喧し、褒貶相半ばす。否、寧ろ罵評の包囲なりし。」と鏡花が自筆年譜で記すように、評価が割れた状態にあった。一方、明治三二年二月に関西で話題となった泉鏡花の小説はと想像してみると、明治三二年一月に雑誌『新小説』に掲載された「三尺角」もその中心となったのであろうか。明治二〇年代から三〇年代という時代の移り変わりは、泉鏡花という作家にとっては、対社会意識が強く奇抜な「想」が突出する傾向にあった観念小説から哀感を伴う抒情性豊かな「花柳もの」「深川もの」へとその軸足を移していく時期とも重なっていた。鏡花の「花柳もの」「深川もの」はその多くが舞台化もされ、作家泉鏡花の代名詞となっていくことになる。「三尺角」も「深川もの」の系譜に連なる作品である。

水蔭は東京から離れて「わづか一年の間に」弟弟子である鏡花が作家としての地位を確立しつつあることを知り内心穏やかではいられなかった。そしてそのことを晩年の著作に書き残さずにはいられなかった。神戸から中央文壇の動向を意識するとき、水蔭の脳裏に鏡花の名が浮かんだことをうかがわせるエピソードである。

そして『神戸新聞』創刊から二年目を迎えた明治三二年の夏、東京を強く意識しつつも神戸の地で懸命に筆を振るっていた水蔭がついに関西を退く決心を固める出来事が起こる。それは明治三二年八月二八日に愛媛の別子銅山

で発生した山津波に取材した小説を執筆したことに端を発した。

二、「鉱夫の恋」と「別子銅山　変災視察録」

江見水蔭が明治三二年に発表した小説「鉱夫の恋」は、同年八月二八日に愛媛県新居浜市別子山村の別子銅山で発生した土砂災害を作中に織り込んだ、一人の鉱夫の偏執的な恋慕を語った小話である。この小説が文章の前後を組み違えて『神戸新聞』に掲載されてしまった。

八月二十八日に、伊予の別子銅山に山海嘯があつて、全滅の部落もあり、死傷者は無数だといふ電報が入つたので、早速自分が特派される事に成つた。

同業者として『大阪毎日』『大阪朝日』それから『時事』の記者其他が、新居浜を根拠地として活動してゐる中で、自分は健脚を生命として、真先に大破壊の銅山を駈廻つて、機敏に材料を取つて、大急ぎで帰神した。

それで、実地見聞の被害記事の他に『鉱夫の恋』といふ短篇小説まで書いて、勉強振りを示した処が、その『鉱夫の恋』を工場の方で組誤つて、文章を前後さしたのを其儘印刷した。自分はそれを単なる正誤に留めず、全部再掲載を主張した処が、岩崎が口を出して中止さした。

もう自分としては我慢が出来なかつた。人が被害地の危険を犯して夜の眼も寝ずに材料を蒐集して来たのに、組違へた工場長の肩を持つて、再掲載の中止を命じるとは、文士を侮辱するも極度であると、奮然として辞職を叫び、社を去つた。

背水之陣を張つたのだ。[5]

『神戸新聞』に掲載されたとされる「実地見聞の被害記事」と「『鉱夫の恋』といふ短篇小説」の初出を現在直接確認することはできない。神戸新聞社は過去二回の社屋焼失や阪神淡路大震災で被災した影響により多くの資料を失っており、水蔭が在籍していた頃の紙面の多くも散逸しているのである。

そもそも水蔭に関しては書誌的な資料整理もまだ十分ではない現状にあるため、まずは現在確認できる関係テクストについて整理しておきたい。小説「鉱夫の恋」は初出の後、明治三二年一一月に雑誌『太陽』で再掲載され、翌年明治三三年四月に博文館から出版された水蔭の小説集『恋』に収録されている。また「実地見聞の被害記事」は、同じく明治三三年一二月に博文館から出版された水蔭の作品集『星』に収録されている探検実記「別子銅山変災視察録」の内容がそれに当たると考えられる。

「鉱夫の恋」という小説は、初出の後に再録された『太陽』第五巻第二四号本文、およびその後出版された水蔭の単行本『恋』収録本文によると、上中下の三巻構成で「下の巻」が小説全体の半分以上の分量を占め、「下の巻（一）」「下の巻（二）」と下の巻を二つに分割するというやや変則的な構成を取っている。『神戸新聞』掲載時から上中下の三巻構成になっていたのか、そして「下の巻」が二つに分割していたのかどうかについては、初出本文を確認することができないという先述の事情により、現在確定することはできない。

しかし、「下の巻」が小説全体の半分以上の分量を占めるということ、そして「下の巻（一）」「下の巻（二）」と二つに分割するという構成の不自然さは、初出時に紙面の前後組み違えがあったことの痕跡が残ったものと見ることができるのではないか。つまり紙面の前後組み違えが発生したのは「下の巻」に該当する箇所であり、「上の巻」「中の巻」「下の巻（二）」「下の巻（一）」の順で掲載されてしまったのではないかという仮説である。「下の巻」の一・二の番号は再掲載時に本来の掲載順を強調するために後付けされたものだったのではないか。

この小説の章構成の謎と水蔭の神戸新聞社辞職事件との関連について今一歩検討を進めるために、次に小説の内容について考えてみたい。

「鉱夫の恋」の梗概は次のようにまとめることができる。

【上の巻】別子銅山で働くことになった青年・和助は、先輩・鉄五郎に案内されながら銅山内のトンネルを進んでゆく途中、牛に牽かせた運搬車を連れた一行とすれ違う。運搬車の上には「川楠様の奥様」が乗っていた。

【中の巻】トンネルを通過して南口から出た後も心ここにあらずの和助。鉄五郎が問いかけると、六年前に見かけて以来忘れられない婦人と「川楠様の奥様」がそっくりであるのだと主張する。六年前、汽車の窓から顔を出していた婦人を踏切から見かけた和助は、風にさらわれた婦人の手巾を拾い、今でも肌身離さず持っているのだという。なんとしてでも「川楠様の奥様」の前に名乗り出たいと熱を上げる和助を鉄五郎はたしなめる。

【下の巻（一）】しばらくして、和助は下駄の鼻緒が切れた「川楠様の奥様」に近づき、鼻緒をすげ替えながら積年の思いを語る。言い募る和助を薄気味悪く思う婦人。

【下の巻（二）】それから三年後の明治三二年八月二八日夜、暴風雨による大水害が起こる。嵐の夜、和助は小足谷倶楽部の下手にある川楠氏の宅へ向かうが、宅の前に到着したその瞬間を「山海嘯」が襲う。場面変わって災害の後、土砂で埋まった死体を掘り出す鉱夫たち。そこから掘り出されたのは、あの「川楠様の奥様」であった。和助は大いに悲しむが、事情を知らぬ周囲の者たちは悲嘆に暮れる和助の姿に驚く。物語の最後は次のような文で閉じられる。

一時の和助は狂人として他からあしらはれた。が、他から見る眼でも此頃は、それが全治したものと為れて、

相変らず能く働くのを、賞して居る。
和助自身では、此頃斯ういふ事を考へて居る。
山海嘯で死んだ川楠の奥様は、如何も初め汽車の窓で見た人とは違つて居るかも知れぬ。つまり川楠の奥様は似た人の一人であつたかも知れぬ。手巾の落し主は、何処か他に居るに相違ない、それを又探し当てなければ為らぬのである。別子の坑道が新居浜まで抜ける頃まで掛らうとも。

作品全体の構成としては、「上の巻」で鉄五郎と和助の道行により物語が始まり、「中の巻」で和助の恋が語られ、「下の巻」でカタストロフィを迎える、という序破急の構成を取っている。

この小説の最後に付されたエピローグは、それまでの展開から考えると蛇足的であるようにも感じられる。作中では和助が抱く一方的な恋情が語られ、「川楠様の奥様」の亡骸を抱えて号泣する和助、という劇的な場面が描かれるにもかかわらず、その後に付されたエピローグ部分では「川楠様の奥様」と自分が汽車の窓で見た婦人とは別人だったのかもしれないと思い直しすっかり立ち直った和助の姿が描かれ、幕を閉じるのである。災害における傷跡から立ち直り、前向きに生きようとする姿をエピローグに置くこと自体は災害を描いた小説の終幕としてふさわしいと言えるかもしれない。しかしここでの問題は、「汽車の窓で見た婦人」と「川楠様の奥様」とを同一視することで成り立っていた本作における和助の「恋」物語が、エピローグでその同一性が否定されることによって、物語の愁嘆場そのものの茶番化を招いてしまうということだ。

「水蔭英気を関西に養ひ、東都文壇其作に接せざると久し、是篇子が往時の作にして数段の進境を見る。[6]」というあおりと共に『太陽』に再掲載された本作であるが、その後の読者の反応は決して芳しくはない。

近刊の『太陽』載する所の水蔭の作『鉱夫の恋』一篇平凡の作也、運筆の自在なるの一事を除きて、何の見る可き所なし。聞く彼れ筆を載せて将に京に来らんとすと。神港の淫風醜俗に汚されたるの筆、一洗し去りて、庶幾くは再び当年の奇矯児を見るを得ん。

（『新生』「雑感」明治三二年一一月）

水蔭自身が本作に対して抱く思い入れと作品評価とが奇妙なほどに乖離している。水蔭が己の進退を賭けてまで守ろうとした作品構成の価値は何処にあったのか。社主に抗議し職を辞したのは、ただ文士としての面子を潰されたことから来る怒りだけが原因だったのか。

ここで本作の構成をもう一度振り返ってみたい。「上の巻」は和助と鉄五郎の語りを中心とした典型的な道行文。古典的とも言える始まりである。「中の巻」から「下の巻（一）」にかけては和助の六年前に一目見たばかりで生まれた「恋」が語られる。言葉も交わさぬ一瞬の邂逅から数年間恋い焦がれ続ける思いの強さや身分違いの恋といったモチーフは、泉鏡花の観念小説「外科室」（明治二八年）を彷彿とさせる。もし「下の巻（一）」で和助が「川楠様の奥様」に話しかけた結果、彼女の方からも和助のことを思っていたことが判明するという展開となったならば、この小説はまさしく鏡花調の運命の恋の物語となったであろう。しかしそうはならなかった。「鉱夫の恋」の場合は完全に一方通行の恋として描かれる。和助が一方的に思いをまくし立てながら証拠の品として差し出す手巾を婦人は「気味の悪さうに」つまみ上げて困惑するのである。「中の巻」で提示された運命の恋の物語という可能性はここで否定される。

そして「下の巻（二）」で描かれる別子大水害発生の夜の場面および災害後の場面は、水蔭自身が直接現場で取材

した成果が存分に生かされた記述となっており、「別子銅山　変災視察録」にまとめられた数多くの証言から事実関係を抽出し、再編成したものとなっている。土砂災害の現場から掘り起こされた「川楠様の奥様」の遺体は生前の面影を見ることもできない凄惨な姿として描かれる。その遺体の損傷の様子や、作業夫たちの様子や遺体発掘作業に支払われた手当の金額なども含め、「下の巻（二）」の災害発生後の場面は、現場の生々しい現実が華美なレトリックを廃した写実的な文体によって描き出される。

「別子銅山　変災視察録」と「鉱夫の恋」の災害描写とを比較すると、小説「鉱夫の恋」では「変災視察録」に多数収められた被災した人々の悲劇的なエピソードはむしろ退けられている。「変災視察録」において水蔭が実際の災害現場で集めた話のなかには、家族と死に別れて残されてしまった者が涙ながらに語る災害前後のエピソードや、一家全滅の現場の様子から災害時にこの家族がどのような行動をしたのかを推測し、それを水蔭が同情的に書き記した記事等も多く見られる。新聞記者江見水蔭には、取材から明らかになった事実を伝えると共に被災した人々がそれぞれに背負った物語を積極的に読み取ろうとする姿勢を見ることができるのである。ルポルタージュ「変災視察録」の記述に見られたこうした劇的な物語性は、小説「鉱夫の恋」においては和助のみが担うこととなる。この小説に登場する和助以外の人物は、和助が語り表現する激情を理解することができない。「人夫も、役員も巡査も、皆吃驚して。『やツ、和助、気が違つたか……』」と呆然とするのみなのである。そして小説の語り手も和助に同情的に語ることはない。作者江見水蔭が書いたルポルタージュに「聴けば聴く程涙ならざるは無し。」等の記者としての共感が書き込まれているのとは対照的な語りの態度である。

このように小説全体を概観すると「鉱夫の恋」は、伝統的な物語の形式から始まり、明治二〇年代に流行した硯友社的な小説のスタイルを経て、旧来の物語性を否定したリアリズム文学へと至る、明治期の小説史を模した構成

が試みられていることがわかる。この構成の試みは小説としての完成度を高めることに必ずしも成功しているとは言い難いが、意欲的な挑戦として評価することができよう。この構成の意味を理解すると、水蔭が『神戸新聞』掲載時に起きた組み違えに対して「単なる正誤に留めず、全部再掲載を主張し」たことも頷ける。紙面の前後組み違えは小説表現の歴史的推移そのものを見せようとするこの小説にとって最も致命的なミスだったのである。

おわりに

本稿では江見水蔭「鉱夫の恋」の小説構成が持つ意味を、作品発表時の事情を勘案しながら読み解くことを試みた。東京を中心とした文壇を強く意識していた水蔭が、中央から距離を取らざるを得なかった時期、それが『神戸新聞』立ち上げの明治三一年から三二年であった。東京から物理的に離れ、文壇への影響力という面からも隔たりを強く感じた水蔭には、東京で活躍する鏡花たちや関西文壇を乗り越える新たな文学的立ち位置を見いだすことが求められていた。そのためにはまずこれまで主流となっていた文学を包括的に捉え直し、それらとは異なる文学的価値観を打ち出す必要があった。その結果「実地見聞の被害記事の他に『鉱夫の恋』といふ短篇小説まで書いて、勉強振りを示した」ものの、「勉強振りを示した」努力が直接評価されることはなかった。構成に隠された企みが読者に届くほどにはその作品が洗練されていなかった、ということであろう。そうしてこの作品は読み返されることもなく歴史に埋もれてしまった。

本稿で取り扱った話題は散逸した初出テクストの問題や江見水蔭関連資料の不整備など今後の課題も多い。しかし「鉱夫の恋」を現代の視点から改めて読み直すと、本作は自然主義文学の時代の到来を予言しているようでもあり、それが硯友社から田山花袋を見いだした水蔭の作であったという点には文学史的価値を見いだすことができる

だろう。

注

1 神戸新聞社立ち上げ当時の事情に関しては、神戸新聞創刊百周年記念委員会社史編修部会編修『神戸新聞百年史』（平成一〇年一一月、神戸新聞社）に多くを依った。

2 江見水蔭『自己中心明治文壇史』（昭和二年一〇月、博文館）。引用に際して、傍点は省略した。

3 注2に同じ。

4 注2に同じ。

5 注2に同じ。

6 『太陽』第五巻第二四号（明治三二年一一月）

（大谷大学講師　国文学（近代文学））

〈キーワード〉神戸新聞、別子銅山変災視察録、硯友社